

一九一四年、勃発した第一次世界大戦は、各地で壮烈な戦いをうみ、ここに西部戦線では独逸両軍が血みどろの闘いを続けていた。その日も両軍一進一退の歩兵戦が始まっていた。空に砲弾が飛び交い、地上では歩兵達が怒号を上げ突進し、機銃に倒れ、互いに槍で突き合い、たまた訳もわからず殺戮を繰り返す。ドイツ兵が塹壕の中に飛び込む。後を追う様にしてフランス兵も、二人は闘いドイツ兵はフランス兵を組み伏せ、短剣で刺す。塹壕の外の戦いはより壮烈になり、両軍の砲火がその上を



映画紹介

戦争の眞実描く

西部戦線異常なし

ひっきりなしに飛んでいる。刺さる責めなげでくれ。君は運のいい奴だ。もう苦しまなくていいんだ。僕は君を殺すつもりはなかった。君のお母さんには僕が手紙を出す。責めなげでくれ。フランス兵はそんな言葉にも塹壕の外の耳に足許に呼び、泣き崩れたまま涙もつんぞくような砲声にも、兵士「そう言うつもりはなかった。僕達の叫び声も気にもとめないで、

虚空の一点を見るように坐ったままであった。その姿は長い苦しみから得た安住の地を静かに楽しんでいるかのようであり、死というものの恐しさを与えるかのようでもあった。ドイツ兵はフランス兵の足許に呼び、泣き崩れたまま涙もつんぞくような砲声にも、兵士「眼りにおちていった。ドイツ兵

の名はポール、弱冠十九歳の若者で、彼にとってこれが始めての戦物の経験であった。

物語は、このポールを中心に展開される。彼は若かった。学校の先生はこう言った。「國家が君達を求めている。君達の中から何人も英雄が生まれるであろう。さあ起つて、今すぐ前線に」ポールはふるいたつた。しかし彼が前線で見たものは、戦争の眞実—それは醜く、悲惨で、つらいものだった。血で血を洗うような戦い。兵士のうめき声、目の前で死んでいく友、狂い出す兵士、食料のない前線生活、ノミ、マシンの戦い。

これらにぶつかったポールは感したが、やがて彼なりに乗り越えていった。物語りはこの間の若者のとまどい、躊躇、か弱さ、運まじさを描き続ける。そして単なる戦争反対論でなく、一兵士—それも多感な十九の若者を中心に描くことにより、戦争で死と対面した人間がどのように考え、行動し、如何に成長するかを追う。この映画には勇壮なマシはない。ただ身を一つんぞくばかりの砲声である。勇敢な胆識はない。ただ肉と肉のぶつかり合う血の戦いである。素晴らしい英雄はいない。ただ十九の苦悩する若者である。戦争の裏面を描いている。そこには「祖国の爲に」等きれいな事はない。生を捨てる者達のみであった。

ポール達の考えが正しいかどうかは判らない。しかし我々が戦争に出てポールと同じ立場に立たされれば、同じようなことを考えるかも知れない。

一つの言葉が印象的だった「僕の肉体は土で、心は泥なのです。毎日毎晩、死と共に食事をし死と共に寝ているのです。」

線生活、ノミ、マシンの戦い。